

豆句集



その七粒目
2015 年立冬号

目次

*俳句

A hard day's silence 2015 井上雪子 …2

パレット 梅津志保 …6

食堂とスーパーマーケット 吉野裕之 …10

*エッセイ

ありのままに受け入れる 井上雪子 …12

際立つ美を探る 梅津志保 …14

*メッセージ

夏合宿 …16

豆句集

みつ
まめ

豆句集 みつまめ
2015年立冬号(通巻第7号)

A hard day's silence 2015

井上雪子

六月や 翅はねの 漆黒迷ひなし

居る場所が光となるや 青薄

金魚など掬はぬと泣き眠りけり

浅き夜の 緘かん黙もく 深し 甲虫

西瓜切る夜や 青さが匂ひけり

夾竹桃昨日が散らばる川沿ひに

富士清水濾されし時をガブ飲み

天ざるにグラスは二つそれつきり

分けたくて幸福になる 銀河の子

水切つて小石跳びゆく 大西日

夏草や戦を知らぬ道を来て

膝をつく democracy や 秋^{あき} 徼^{ついで}雨

秋蝶や卵は軽くはないでせう

小さくて碧くて夜の秋の石

夕雲や白き小菊を携へて

梨を剥くみずみずしさを聞かせけり

彼岸花ずうんと痛む記憶かな

澄む水や問はないことを底に置き

ひたすらに木の实降りけり惜しみなく

秋晴れの鉄橋渡るや向かひあひ

僕たちが静かに身体にゐて立冬

パレット

梅津志保

窓際の朝を譲られ蓮の花

米をとぐ夏清水かな里帰り

合戦の跡に立ちけり青嵐

朝蟬や鳴き終わるとき山白む

山清水手のくぼみから巡るかな

夏の滝大きな声で呼ばれけり

山寺の読経や雲の峰ましろ

多国籍スパイス並ぶ炎暑かな

果樹園の実りを巡る夏帽子

高跳びの背中で越える夏の果て

秋風と墓の前まで戻りけり
木犀の花積もりゆく切り株に
家までの赤い実の道一步ずつ
遠くまで揃って着けよ雁の列
赤とんぼ煉瓦の駅の待ち合わせ
旅終えし木の実なりけり湖の浜

犬の尾は金色に巻く秋うらら
秋雨や紅き蕾の鉢に決め
ポケットに銘菓をもらう冬はじめ
小春日や笊を干したる港町
雪雲の冠ずしり連山に

食堂とスーパーマーケット
吉野裕之

涼しくてホームありけり原爆忌

九勺の片口秋のはじまりぬ

台風のあとの梯子は濃き影す

食堂も馬も空腹秋日和

冷やかにインターネットまでの距離

しんがりには雷魚を置きにけり

波郷忌のどすんスーパーマーケット

薄給の右手左手息白し

三人が冬の話をしてゐたり

大寒の軸傾けて止まりけり

●ありのままに受け入れる◎井上雪子

小さな俳句が深く豊かな時間・空間を抱える不思議、言葉による写生のゆくえ、村越化石自選句集『籠枕』に、「見つめる姿勢・受け入れる力」を学びました。

団扇手にわれを眺むるわれが居り
着ぶくれて己が命をあぶかりぬ

化石氏の俳句の大きな特徴のひとつがここにある。自分を写生する、そういう姿勢で生み出される俳句だ。

「団扇」とか「着ぶくれて」とか、季語はその本意のもとに俳句を支える。が、

季語なる何かを掴み、化石氏は身体のさらに内へ、心のありかへと眼差しを向ける。己が命をあぶかる、私には思いもよらない感覚だ。

麦秋の妻子を生かす癩の銭
みな遠き故郷持ちて粽食ふ
杖にあて寂と花野の石ありぬ

化石氏は少年時代にハンセン病と診断され療養所で終生を過ごされた。感染についての説明や治療薬の開発など、今では根治可能、隔離不要となり発症者も稀という自覚を持ち、大野林火氏を師として俳句に向かった。

ハンセン病ということを経験に織込ま

ずにいることも可能であろうし、実際、

句集中には病とは無関係な、事物に即した美しく楽しい句が多い。

霞より猫の持て来し松ぼくり

寝遅れてゐるもたのしき五月の夜

独活浸す水夕空につながらりて

未來持つ子に拾はれてゆく木の実

この純心さが現実をありのままに受け入れる強さ、自分自身のまるごとを正面から見つめるしなやかさとなるのだろう。そして自我から離れた眼差しは身体的な視力を越え、事物の本質を捉え、化石氏にしか作れない作品としての奥行きや微笑みとなるのだろう。

睡りの間妻幸あらむ足袋紅き

慰霊碑に涼しき風を送るなり

望郷、母上や細君や晴眼への思い、苦痛、悲しみもありのまま詠まれ、それでいて怨みや非難の色を帯びない。

常闇とこやみの身を湯豆腐にあたためぬ

春をまだ遠くにおきて白湯を飲む

冬の長さ、厳しさを詠む時にも湯豆腐や白湯はとても美味しそうなのだ。生も死も石も風も同じように尊ぶ俳人の芯が自らを浄化するのだろうか。

言ふべきを言つて果てしか終戦忘

句集最後のページ、終戦忘の二句が並び、迎え盆の句で終わる。あの世もこの世と同じように見つめ、受け入れるという俳句の大きな力をあらためて思う。

●際立つ美を探る◎梅津志保

薪能を観た。暗闇に篝火の明るさが際立つた強く印象的な空間。明暗・陰翳の美を大切にできた日本人の意思を受け継ぎたいと思った。今号はそんな「対比」を一句の中に探ることとした。

佛間まで磯蟹あがる暑さかな 小澤寛
海辺に建つ、佛間があるどっしりとした日本家屋。いよいよ始まった本格的な暑さ、じりじりと無風。だが窓は開かれている。そこに磯蟹が侵入してくる。暑さから逃れたい一心だろうか。固い殻と大きな鉢、磯蟹にとっては人家とて住処

のひとつにすぎないともいうように、ずんずんと佛間へと進んできてしまった。

佛間は黒、磯蟹は赤、句の中の最も鮮明な対比は「色」。そして動かぬ祖先と、今を動く磯蟹という「動静」、長い時間の「過去・現在」という対比。佛間のひんやりした「涼」と外の燃えるような「暑さ」。いくつもの対比が静かに積み、より強く、確固とした世界をつくり、そこから美しさがにじみ出る。そして共感はより深いものになる。

歎喜して菌分裂や天の川 小澤寛
天の川が広がる静かで大きな夜の下、この地では、ひとの眼には見えない菌が

分裂し、成長を続けている。菌は、分裂できる環境が整い、自らを増殖させ始めると歓喜し、無心で、一途に爆発的に分裂する。天の川という広大な世界もまた、星屑が歓喜して分裂しているかのようだ。「地と天」、「極小の生物と極大の宇宙」。遠く離れてはいるが、天と地は一体となり、宇宙も人間も菌も等しくその一部であるような世界が一句の中にある。

天の川も菌も今までもこれから、変わることもなくその営みを続けていくだろう。

蟻地獄にかがむ故郷の時間かな

細見綾子

故郷に帰り、のんびりと庭先で過ごしていたか、少し遠出を楽しんでいたのだろうか。蟻地獄を見つけ、しゃがみ込む。その素直な気持ち。蟻地獄は都会の空き地にも見つかるかもしれないが、通り過ぎてしまうものが日常だ。小さな穴へ吸い込まれる、ゆったりとした大きな時間、その対比が楽しい。

岩田由美氏の鑑賞は、「故郷だから虫を飽かず眺めていた子どもの心に戻れる」と、子供時代にまでさかのぼる大きな時間であることを教えてくれる。故郷という響きがより輝く。時の立つのも忘れる、そんなことを許してくれる尊い時間と思う。

夏合宿



俳句ユニット「豆句集 みつまめ」は、この夏、小さな合宿を開催し、互いの俳句への思いを受けとめあい、「豆句集 みつまめ」の根本についての考えを深めました。

「俳句、楽しみにしています」と待っていてくださる方のもとへ立冬号を送り出すうれしさと感謝、「豆句集 みつまめ」が存在する意味を新たに問いながら、元気に歩きたいと思います。

豆句集



豆句集 みつまめ

井上雪子

梅津志保

Producer * 吉野裕之

※出典一覧

- ・村越化石 自選句集『籠枕』（文學の森、二〇一三年）
- ・小澤實 『瞬間』（角川書店、二〇〇五年）
- ・細見綾子 『存問』（角川書店、一九八六年）
- ・岩田由美 『綾子の一句』（ふらんす堂、二〇一四年）

このファイルはホームページ配布版のため、
奥付の内容が印刷版のものとは異なります。



豆句集 みつまめ

2015 年立冬号（通巻第 7 号）

2015 年 11 月 8 日発行

発行所

みつまめ工房

website >> <http://homepage3.nifty.com/a-un/mitsumame/>

blog >> <http://819mitsumame.blogspot.jp/>

制作：アトリエ云 印刷：啓文社

定価：300 円（税別）